

【津村晃佑氏の研究目的とは】

津村晃佑氏はホブズボウムの「伝統の発明」の概念をもって東北仙台の「すずめ踊り」を観察し、本論ではそこに表れる「伝統」とは何かを明らかにしようと試みた。

【事務局注：ホブズボウムが著書「伝統の発明」で主張していること】

ホブズボウムは「『伝統』とされるものごとは、古いと言われるし、そう見える。しかし、その起源がかなり最近であることはしばしばで、ときには発明されることもある」という考え方を打ち出した。

また「発明された『伝統』」の場合、過去とのつながりがあるようでも「大半が見せかけ」という。

でも、それはそのときどきの社会が抱える問題の「症状」や「指標」でもあると言う。そして世界史的にはその心を国や地域に結びつけ、人々を束ねたい政治権力に役立つような「伝統」が創られていったのだと彼は論じている。

【津村氏が観察した、新しく生成された「すずめ踊り」の中で起こる変化について】

津村氏は平成10年に結成された祭連「朱雀」を平成14年まで観察して、その変化について以下の様に記す。

①”バレエ踊り”の廃止と”自由踊り”の導入

創設期に仙台市のバレエ教室の先生に外注振り付けを依頼したが、メンバーに不評でメンバーが漠然と思い描いていた”すずめ踊りらしさ”にそぐわなかった。そして自分たちが思い描くすずめの動作から”自由踊り”を導入した。

②”流し踊り”が審査に加わったことで前方に進む踊りが工夫された

もちろん本来の雀踊りにない動作である。”舞台踊り”と異なり、前進することを前提に踊りが創られることに加えて、踊りと踊りの間の移動（朱雀はこれを”アイドリング”と呼ぶ）にも踊りの要素を加え、常に何らかの踊りの動作が行われる状態を作った。

③阿波踊りからの影響

青葉まつりの審査で優勝し、阿波踊りへ派遣された朱雀は以後、仙台の代表として強いプライドを持つとともに、”舞台踊り”から”流し踊り”へとカ点を移動させていった。そしてその中に「うかれの合方」が誕生していった。これは阿波踊りへの参加を見越して、朱雀の中に「観客をあおって祭の中に引き込む部分」が必要になったからである。これは「踊る阿呆に、見る阿保。同じ阿保なら踊らにゃソソ・ソソ」と言う阿波踊りの代表的な囃子唄の影響を受けたものである。

【津村氏が観察して、すずめ踊りの中で変化しないことの発見】

一方ですずめ踊りには変わらない部分もある。

それは「両腕で8の字を描くこと」。「腰を落とした状態で左右の足で交互に飛び跳ねること」である。

この2つの動作は平成9年に協賛会が「雀踊り」から舞う動作と跳ねる動作を取り出して作った「舞すずめ」と「はねすずめ」に求められる。その後加わった”バレエ”や”自由踊り”、そして”アイドリング”を見ても、どんな一連の動作が加わっても「雀踊り」に含まれる前述の2つの動作のうち、少なくとも1つが常に軸となっている。

津村氏の論文作成時点（平成15年）ですでに、「舞すずめ」と「はねすずめ」という区分は行われなくなったが、平成9年当時に、協賛会が現在の「すずめ踊り」の中核をなしているこの2つの動作を「雀踊り」から取り出して概念化していたことは特筆すべきことと津村氏は指摘する。しかしそれらの動作が単独で「すずめ踊り」を成り立たせることが出来ず、2つが組み合わさって初めて「すずめ踊り」となり得るのである。そのために「舞すずめ」と「はねすずめ」の区分がすぐになくなったのであろうと推測している。

【注記】

特に論文の一部を引用と記載していない部分は、ナイス研究員大塚により要旨をまとめたものです。

また漢字で「雀踊り」と表記した踊りは石工の伝承芸能を表し、さらにひらがなで「すずめ踊り」と表記した踊りは昭和62年以降に新しく生成された現代の郷土芸能を表しています。

ナイスは単に仙台を真似るだけでなく、堺に根付くすずめ踊りを考えます

【すずめ踊りが市民の踊りとして定着する経緯（論文の一部をそのまま引用）】
最初の「雀踊り」は、仙台城の築城に関わった泉州堺の石工による即興の踊りであった。それが戦争を挟んで衰退し、その後仙台第一中学校で復元されたことで、石工と生徒によって文化祭や諸団体主催の全国大会などで踊られるようになった。
それも長くは続かなかったが、NHK大河ドラマ「独眼竜政宗」の影響で仙台が脚光を浴びたことにより、伊達政宗に由来する仙台青葉まつりが再び「雀踊り」を復元した。この時に「雀踊り」は初めて石工の手を離れ、一般市民の誰もが踊れる「すずめ踊り」になった。
「すずめ踊り」になって以来、石工や第一中学校の生徒に踊られていた時と比べ、その踊りは多様化してきている。担い手は市民が中心となり、バレエ風にアレンジした踊りなど、以前の「雀踊り」には無かった踊りが多く生まれた。
またコンテスト形式で踊ることで「すずめ踊り」の位置づけが少しずつ変化し、仙台・青葉まつりに取り込まれたときと比べると随分様変わりしている。呼び物としていかに効果的に演出するか、観客を惹きつけてより多くの参加者を集めるにはどうすべきかと言った様々な試みを経て現在に至っている。
そして現在の当事者集団の一例である朱雀でも、「すずめ踊り」は変化している。その理由は朱雀のメンバー自身の感情及び目的であり、これらを満たすためにその都度「すずめ踊り」を自由に変化させてコンテストで踊っているのである。

【津村氏の研究の結論（論文の一部をそのまま引用）】
ここでホブズボウムの「伝統の発明」の概念に立ち返ると、彼が自らの論考の中で主張していることの一つは、「伝統」は創られるものであるということであり、これはここまで述べてきたことから明らかであろう。石工たちの踊りが再発見され、仙台の「伝統」として広く踊られるようになったのは、仙台・青葉まつりに取り込まれてからである。
ではホブズボウムの二つ目の主張、すなわち恒常性についてはどうであろうか。「すずめ踊り」は、現在に至るまでダイナミックに変わっているため、一見すると彼の主張は当てはまらないようである。しかし「すずめ踊り」の変化の細部を見ると、「雀踊り」に含まれる2つの動作と囃子は変化することなく現在まで継承までしていることが分かる。この部分は、一般に「伝統」と意識されていない部分であり、語りの中にも表れていないが、これらなくして「すずめ踊り」は成り立たない。このように見てゆくと現在仙台・青葉まつりで見ることのできる「すずめ踊り」は昔のままの状態、つまり石工たちの「雀踊り」がそのままの状態が続いているのではなく、新たな生成され続けている踊りと言える。また同時に、どのように踊りが変化しても、その変化は「雀踊り」に含まれている動作を常に軸として、その周りで起こっているのである。

【ナイスの取り組み姿勢】
川邊さんはこうした仙台すずめ踊りの歴史を自らの目で確認して理解したうえで、仙台の山口頭はじめ仙台ですずめ踊りを発展させたいと願う方々と対等にお話をされています。
同じように堺の郷土史も前田監事とともに研究議論できる機能を事務局に持たせて、「堺に根付くすずめ踊りとは」という意見交換をFacebookなどで展開しています。
だから前田監事は協賛会の中でナイスだけ、忘年会出席をされています。そして「ナイスの人たちは、単に自分が楽しいからと踊るだけでなく、誰かに喜んでもらいたいと踊る。このところを育てていけるのは川邊さんが郷土の歴史も大切に、またすずめ踊りの歴史もどこよりもしっかり研究しているナイスだからこそ、だと思えます。そうした川邊さんの地元愛の活動姿勢に敬服している。」とリスペクトの言葉を頂戴しています。
私たちナイスは「堺を元気にする」あるいは「堺から本物の笑顔を届ける」ことが活動の目的です。
そのために楽しい練習でなければいけないというのが川邊さんの昔からの考え方です。
でも楽しい練習とは、真剣な練習でもあります。
そのために見えないところで川邊さんはこうした仙台や郷土堺の研究も手掛けています。
堺は交易、人と人のつながりの町。そして字で言えば境がその語源。だから摂津や河内の人もみんな一緒。堺市だけが堺ではないと川邊さんは考えています。そうした取り組み姿勢があるから今の「明るく、楽しい、前向き」（ATM）なナイスがあると思えます



平成30年12月 23日発行